

『イエスが語った福音』

聖書箇所：四福音書から随所

'22/04/24

いつもでしたら、今日は「エペソ人への手紙」から学ぶところですが、ちょうど今、そのエペソ書の学びは、1章が終わって、2章に入る前の小休止をしているところですし、今日は第4主日でもあるので、今日は、特に大切なことについて、皆さんと一緒に考える時を持ちたいと思います。そのテーマは、「イエ様が語られた福音とは、どのようなものであったか？」というものです。

命題：イエ様が語られた福音とは、どのようなものだったでしょう？

皆さんは、どうか分かりませんが、私は今、ここ日本のキリスト教界全体で語られているメッセージについて、“ある種の危機感”を持っています。…と言いますのも、多くのキリスト教会が、そのHPや教会の看板、あるいは、礼拝のメッセージで語られている内容が、「あなたは愛されています！神の目に、あなたは高価で尊い！神は愛です！」というようなものがあまりにも多くて、どうも、未信者に媚を売っていると言うか、あまりにも、おべっかが過ぎて、福音書に記されてあるイエ様が語られた福音とは、大きく違っているように思われるからです。

そこで今日は、イエ様が語ってくださったメッセージの代表的なものを3つほど観察していくことによって、当時イエ様が語ってくださった救いに関するメッセージが、どのようなものであったか？そして、私たちが今、この世の中に発していくべきメッセージについて、皆さんと一緒に考えていきたいと思います。そうすることによって、願わくは、ますます、神様のみこころというものがなされ、こんな混沌とした世の中にあっても、神様が“本当に救われた者たち”を起してくださいますこと…、そのことによって、ますます、神様の偉大さが明らかにされていくことを願うものであります。

I・山上の説教！（マタイ5-7章）

本当は、イエス様の語ってくださったメッセージを1つ1つ、すべてのメッセージを検証できれば良いのかも知れませんが、時間的な理由もあって、それはできません。そこで、まずは、イエス様が語ってくださったメッセージの中で、1番有名かつ長いものである「山上の説教」を観察していきたいと思えます。…と言いましても、「山上の説教」だけでも、マタイ5-7章という3章に渡った長いものなので、それを1節1節読んでいくだけでも、多分、今日のメッセージの時間が終わってしまうと思います。そこで、今日のところは、その山上の説教の概要と言うか、論旨…、大まかな内容について見ていきましょう。

●「山上の説教」の論旨

「山上の説教」は、別名、「山上の垂訓」とも呼ばれています。「垂訓」と言いますのは、「（上の地位に）いる者が」教を垂れること。また、教訓を後世の人々に残すこと。…」を言いますが、ま、基本的には、説教と同じような意味の言葉です。私たちの教会では、過去、2006年と2016年に、この「山上の説教」を結構な時間をかけて学んだことがあります。皆さんは覚えてくださっているでしょうか？

どうぞ、聖書をお持ちでしたら、マタイ5章をお開きください。その説教の初めに、イエス様は、『心の貧しい者は幸いです…』（マタイ5:3a）というみことばから始まる、あの有名な「八福の教え」という、イエス様から見て「幸いな者たちの特徴」について教えてください。「イエス様から見て幸いな者たち」と言いますのは、天に国籍を持つ者…、言い換えれば、「救われた者たちのこと」です。だから、彼らは、例え、心が貧しかろうと、悲しんでいようと、あるいは、迫害されていようと幸いなのです！そして、マタイ5:12以降のみことばをご覧ください。分る通り、救われた彼らは、天にあって素晴らしい報いが与えられるのです！救

われた者たちは、今もう既に、「地の塩であり、世の光」なのです。

そして、マタイ5:17以降で、イエス様が教えてくださっているように、イエス様こそは、『律法や預言者』つまり、旧約聖書の教をすべて成就…、実行されたのです！…にも関わらず、当時の律法学者やパリサイ人たちが、イエス様と弟子たちこそを「律法の教を守っていない！」と言って非難したのは、彼らの（聖書のみことばに関する）理解が間違っていたからです。だから、マタイ5:20で、イエス様が教えてくださっている通り、「律法学者やパリサイ人たちの義では救われ得ない」のです！そのすぐ後、21節以降で、イエス様は、当時、パリサイ人たちが教えていた教を引き合いに出して、「あなた方は、こう教わっているでしょ？でも、正しい理解（＝神様のみこころ）はこうなのです！」ということ、合計6回も繰り返して、当時の教師たちの過ちと、正しい神様のみこころを説き明かしてくださっているわけです。…ね！皆さん、分かってくださいます？当時、神様のみことばを教えていたはずの、律法学者やパリサイ人たちの聖書理解は、残念ながら、大きく間違っていたのです！

マタイ6章に入って、イエス様は、『人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい！』（マタイ6:1a）ということ警告されます。…と言うのは、当時のパリサイ人たちが、まさに、「人に見せるために、良い行ないをしていたから」です。だから、2節以降のみことばが教えてくれているように、彼らは、わざわざ、ラッパを吹いてから善行をしたり、わざと人通りが多い所で施しをしたりしたのです。まさしく、彼らパリサイ人たちの心や関心は、この世での名誉やお金に向いていました…。だから、イエス様は、ここマタイ6章で、本当に救われた信仰者が追い求めるべき生き方や、祈りについて教えてくださったのです。

そして、最後のマタイ7章で、イエス様は、『さばいてはいけません！』（マタイ7:1a）ということをおっしゃいます。…時々、このみことば“だけ”が強調されてしまって、「クリスチャンは、いつ如何なる場合も、人を裁いてはならない！」というようなことを教える教師たちが居ますが、でも、明らかに、このみことばは、そういったことを教えているではありません。…でしょ？そのすぐ後のみことばを見てくださったら分かる通り、イエス様が注意＆警告されたのは、「まずは、自分自身の罪や過ちを悔い改めなさい！その上で、他の人たちの過ちや問題を正してあげなさい！」ということのはずです。そうでしょ！

もちろん、ここで言われているのは、まずは律法学者たちであり…、パリサイ人たちのことです。イエス様は、彼らのことを『偽善者』と言って、厳しく非難しておられます。そして、イエス様は、『にせ預言者たちに気をつけなさい！』（マタイ7:15a）と言って、本物の救いには至らない「形だけの信仰」と、人を救うことができる「本物の信仰」、つまり、「神様のみこころを行なおうとする信仰者こそが本当に救われているのだ！」ということをお教えられるわけです。

●最後の結末＆警告！

毎度毎度言っていますように、ここマタイ7章で、イエス様が教え…、また、警告してくださっているのは、「クリスチャンとノンクリスチャンとの違い」ではありません。…と言いますのは、ここでイエス様が教えてくださった「天の御国に入れなかった者たち」というのは、マタイ7:21-23にあるように、イエス様のことを『主よ！主よ！』と呼んでいた者たちであり、また、イエス様の名によって、預言をしたり、悪霊を追い出したり、あるいはまた、たくさんの奇蹟を行なったような者たちであったからです。…そうでしょ！

…と言うことは、ここでイエス様が教え、また、警告してくださっているのは、ただ単に、「ノンクリスチャン」たちのことではなくて、この言い方は決して好きではないのですが、言わば、「自称クリスチャン」、つまり、「自分はイエス様を信じている！救われている！」と思い込んでいた者たちのことであって、イエス様は、ここマタイ7章で、「そういったことが少しでも起こらないように！」という思いをもって、かなり厳しい口調で、警告してくださっているではないでしょうか？

●現代のキリスト教会の問題

しかし、現代、多くのキリスト教会では、他の人たちの信仰や教義に対して、異を唱えることはタブーとされていて、正直、私も神学論争というものは好きではありません。でもね！皆さん。例えば、あのパウロは、ガラテヤ書1章で、どんなことを激しく憤っていました？…どうぞ、できましたら、ガラテヤ1:6-10をご覧ください。『6 私は、キリストの恵みをもってあなたがたを召してくださったその方を、あなたがたがそんなにも急に見捨てて、ほかの福音に移って行くのに驚いています。7 ほかの福音といっても、もう一つ別に福音があるわけではありません。あなたがたをかき乱す者たちがいて、キリストの福音を変えてしまおうとしているだけです。8 しかし、私たちであろうと、天の御使いであろうと、もし私たちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら、その者はのろわれるべきです。9 私たちが前に言ったように、今もう一度私は言います。もしだれかが、あなたがたの受けた福音に反することを、あなたがたに宣べ伝えているなら、その者はのろわれるべきです。10 いま私は人に取り入ろうとしているのでしょうか。いや。神に、でしょう。あるいはまた、人の歓心を買おうと努めているのでしょうか。もし私がいまお人の歓心を買おうとするようなら、私はキリストのしもべとは言えません。』

⇒皆さん、分かってくださいます？…実はこの当時、パウロたちが宣べ伝えた福音とは別物の、“福音”のような教え”を説く者たちが居たのです。それは、簡単に言うと「ユダヤ主義」と言いまして、「救いとは、信仰だけによるのではなく、律法の行ないも必要である！」という間違った教えでした…。でも、悲しいことに、その当時、ガラテヤ地域の教会メンバーたちは、その違いに気付くことができずにいたのです。…そう考えますと、私たちは、今教会で語られている教えが…、あるいは福音のメッセージが、本当に正しいものかどうか？ということ、を、しっかりと吟味することが必要なのではないのでしょうか？

Ⅱ・ヨハネ 15 章のメッセージ！(ヨハネ 15:1-10)

どうぞ、今度はヨハネ 15 章に記されてあるイエス様の“メッセージ”を見ていきましょう。ここもまた、大勢の人たちに知られ、また、愛されているメッセージであります。ここで、イエス様は、どんなことを教え、また、警告して下さったでしょう？ヨハネ 15:1-10 で、イエス様は、こう教えて下さいました。

- 1 わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。
- 2 わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き、実を結ぶものはみな、もっと多く実を結ぶために、刈り込みをなします。
- 3 あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことばによって、もうきよいのです。
- 4 わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。
- 5 わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。
- 6 だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。
- 7 あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。
- 8 あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになります。
- 9 父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛の中にとどまりなさい。

10 もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。それは、わたしがわたしの父の戒めを守って、わたしの父の愛の中にとどまっているのと同じです。

●このメッセージの論旨

今読んだ、このメッセージも大変有名なみことばです。ここで、イエス様は、「まことのぶどうの木である、わたしに留まりなさい！」ということをおっしゃっています。「もしも、わたしに留まっていなければ、その者たちは枝のように投げ捨てられて、人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。」と警告されてあります。これって、黙示録 20 章に記されてある“永遠の刑罰”をイメージしません？

しかも、ここで、イエス様は、まことのぶどうの木である自分に繋がった者こそが、本当に救われた者であって、イエス様は、その救われた者たちのことを、いろいろな表現で説明してくださっています。例えば、それは、2 節の『実を結ぶ…』とか、3 節では、『あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことばによって、もうきよい…』とか、5 節、『人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。』とか、7 節でも『あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら…』、あるいは、8 節、『あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになる…』、また、9 節、『わたしの愛の中にとどまりなさい！』、そして、10 節、『もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまる…』など、これらすべてが、イエス様を本当に信じた者たちが持つような特徴ではありません？

その逆に、救われていない者たちの特徴を挙げると、彼らは実を結ばない、きよくない、イエス様の内に留まっていない、イエス様の弟子ではない、イエス様の戒めを守らない…となっていきます。これって、さっき見たような、(あまり好きな表現ではないが)「自称クリスチャン」たちが持っているような傾向ではないでしょうか？

●『信じる』の反対語？

皆さん、ヨハネ伝 3 章の最後に、ヨハネはどんな言葉で、3 章を結んでいるか覚えてくださっています？⇒そこには、こうあります。ヨハネ 3:36、『御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる。』って…。皆さん、気付いて下さいました？ここで、使徒ヨハネは、「御子(＝イエス・キリスト)を信じる者は皆、永遠のいのちを持つ」という、ごく普通の真理について説明をしてくれているのですが、皆さんに注目してほしいのは、その後半部分です。ここで、ヨハネは、普通なら、「御子を信じる者は…」と言ったわけですから、その反対語として、「御子を信じない者は…」とか、「御子を信じなかった者は…」と言うべきなのに、そうは言わず、何と言っています？『御子に聞き従わない者は…』と言っていますでしょ！

つまり、こういったことから何が分かるのか？…それはつまり、「御子を信じる」ということの反対語は「御子に聞き従わない」ことであり…、それをもう少し言い換えると、「御子を信じる」ということは、つまり、「御子に聞き従う」ことでもあるということなのです！違います？

それと関連のあるエピソードなのですが、どうぞ、もしできましたら、ヨハネ 8 章のみことばをご覧ください。ヨハネ 8:30-31、『30 イエスがこれらのことを話しておられると、多くの者がイエスを信じた。31 そこでイエスは、その信じたユダヤ人たちに言われた。「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。』と続いています…。「イエス様の言葉に留まるとか、本当に、イエス様の弟子だとか…」、何だか、さっき見たヨハネ 15 章の教えとかぶっていませんか？

皆さん、分かってくださいます？ここで、イエス様は、多くの者たちがイエス様のことを信じた！ということを受けて、「良かったですね！皆さん！皆さんは、もう天国へ行けますよ！どうぞ、安心して下さい！」とは

おっしゃられなかったのです。…と言うよりもむしろ、多くの者たちがイエス様のことを信じたというのに、それに、何だか、釘を指すようなことをおっしゃられたわけです。「良いですか？あなたたちはたった今、このわたしのことを信じたと言うが、もしも、あなたたちが、わたしの言葉に留まり続けるのなら、あなた方は本当にわたしの弟子です！」って…。そうでしょ！

でも、どうか、皆さん、もしできましたら、1度、この後のやり取りをご自分でも読み進めてみてください。…どうか今は、47 節で、イエス様がおっしゃられたみことばに注目してみてください。そこには、こうあります。『神から出た者は、神のこばに聞き従います。ですから、あなたがたが聞き従わないのは、あなたがたが神から出た者でないからです。』…イエス様は当然、この時に信仰告白をした者たちが本当には救われて“いない”ことをご存知でした。…だから、彼らは、この後でイエス様に対して何をしました？何と、彼らは、イエス様のことを「悪霊につかわれている！お前は、神を冒涇した！」と言って、イエス様のことを石打ちにして、殺そうとしたわけです。

果たして、「私はイエス様を信じます」という信仰告白をした者たちは皆、救われているのでしょうか？⇒ いいえ！少なくとも、このみことばは、そうは教えません！例え、口で、「私はイエス様を信じます」と告白しても、まだ、本当には救われていない！ということが起こり得るのです。…だって、私たちの周りでも、1度、はっきりと信仰を告白したような者たちが、後になって、その信仰を棄ててしまった…みたいな現実を知っているじゃないですか！そうでしょ！

今、多くのキリスト教会では、1度、「イエス様を信じます」という信仰告白した者たちの信仰を疑うというか、その信仰が果たして本物であるかどうかを吟味するよう勧めると、大変な非難をされたり、攻撃を受けたりすることがあります。…でも、イエス様は、1度、はっきりと信仰告白した者たちの信仰を否定されたりしなかったでしょうか？…どうか、今一度、イエス様が語ってくださった福音のメッセージを思い出して、いい加減に、その人の信仰告白を受け入れるのではなく、もしも、その人の生き方に何か問題があるようなら、私たちは“神の愛をもって”、その人が抱えている問題を指摘してあげるべきじゃないでしょうか？それこそが、この聖書全体が教えてくれていることではないでしょうか？…実は、そういったことが次のポイントでもあります。

Ⅲ・マタイ 18 章で教えられてある 教会戒規 ! (マタイ 18:15-20)

最後に、「教会戒規」とも呼ばれているマタイ 18 章のみことばを、皆さんと一緒に観察していきたいと思えます。正直、こういった厳しい教えも、イエス様は語ってくださったのに、現代の多くのキリスト教会は、こういったみことばに目をつむってしまっているのではないのでしょうか？…と言いますのは、私たちの教会を含め、現代では、多くの教会が、こういったような厳しいみことばを実行したというようなことを聞く機会がほとんど無いからです。マタイ 18:15-20 には、このように記されています。

- 15 また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、ふたりだけのところで責めなさい。もし聞き入れたら、あなたは兄弟を得たのです。
- 16 もし聞き入れないなら、ほかにひとりかふたりをいっしょに連れて行きなさい。ふたりか三人の証人の口によって、すべての事実が確認されるためです。
- 17 それでもなお、言うことを聞き入れようしないなら、教会に告げなさい。教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人が取税人のように扱いなさい。
- 18 まことに、あなたがたに告げます。何でもあなたがたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたがたが地上で解くなら、それは天においても解かれているのです。
- 19 まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心をつなげて祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。

20 ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」

●ここの間違った解釈

まずは、皆さん、よく、このみことばを使ってなされている“間違った聖書解釈”について説明させてください。実は今読んだ、特に、19-20 節のみことばを使って、「例え、私たち少人数でも、心を合わせて祈るなら、イエス様もまた、そこに居てくださって、天の父なる神様が、その祈りを聞いてくださる…」という、よく祈禱会などをイメージして語られているメッセージです。…正直言って、私は過去、何度、そういったようなメッセージやコメントを聞いたか知れません。…でも、そういった解釈は明らかに間違いです！

どうして、そういったことが断言できるかと言いますと、どうぞ、皆さん、19 節前半のみことばに注目してみてください。…ここで、イエス様は、何とおっしゃっています？⇒『まことに、あなたがたに“もう一度”、告げます。』とイエス様はおっしゃっておられるでしょ！「もう1度…」というからには、その前に、イエス様は、同じ内容のことを話しておられるというはずですが。…しかし、このみことばから、どう遡っても、「2人でも、3人でも、イエス様の御名において集まる場合には、イエス様もそこに居てくださっている…」というような教えを見付けることはできません。

じゃあ、その前には、具体的に、どんなことが教えられてあるのか？と言いますと、先程言った「教会戒規」の教えです。実は、このみことばは、少なくとも、15 節以降から、「同じ1つの文脈」として扱わないといけないのです。

●教会戒規のステップと、その目的

さあ！じゃあ、ここ 15 節以降でイエス様は何を教えようとしておられるか？⇒それは、何らかの罪を犯し続ける人物が、その罪を悔い改めるかどうか？ということです。具体的には、こんなステップですね？…もしも、①ある兄弟が罪を指摘されても、その罪を悔い改めることをせず、ことさらに罪を犯し続けるならば、その者は、②次に、このみことばに従うならば、16 節にあるように、1人か2人の証人の前で、その罪を指摘されるべきです。それでも、なお、その者が罪を悔い改めないのなら、今度は、17 節にあるように、③教会全体が、そのことを知って、教会全体が、その者に罪を悔い改めるべきことをうながします。しかし、それでもなお、その者が罪を悔い改めようとしない場合は、④最後のステップとして、教会は、その人物を当時の異邦人が取税人のように扱う、つまりは、教会から除名するわけです。

でも一体、何のために、教会は、このような…、一見、愛の無いような“冷たい仕打ち”をするのでしょうか？実は、ことよく似た状況のことが、1 コリント 5 章でも記されています。実は、その時、コリント教会には、自分の父親の奥さん(=自分の義理の母親)のことを、自分の妻にするような者が居たようなのです。実は、そういったことは、当時、不品行の罪が横行していたコリントの町でも、あまり考えられないようなことだったようです。

そこで、パウロは、当時のコリント教会が、そういった不品行の罪を犯し続ける者のことを、教会として正しく対処しなかったことを責め、私パウロは、コリント教会から遠く離れていても、その罪を犯し続ける兄弟のことを主イエスの御名によって裁いた！というわけです。1 コリント 5:1-5 には、このように記されています。『1 あなたがたの間に不品行があるということが言われています。しかもそれは、異邦人の中にもないほどの不品行で、父の妻を妻にしている者がいるとのこと。2 それなのに、あなたがたは誇り高ぶっています。そればかりか、そのような行いをしている者をあなたがたの中から取り除こうとして悲しむこともなかったのです。3 私のほうでは、からだはそこにいなくても心はそこにおり、現にそこにいるのと同じように、そのような行いをした者を主イエスの御名によってすでにさばきました。4 あなたがたが集まったときに、私も、霊においてともにおり、私たちの主イエスの権能をもって、5 このような者をサタンに引き渡したのです。それは彼の肉が滅ぼされるためですが、それによって彼の霊が主の日に救われるためです。』

⇒いかがでしょう？皆さん、分かっただけですか？…さっき見たマタイ 7 章には、「裁いてはいけません！」とありましたが、パウロは、ここで、「ある兄弟を主イエスの御名によって裁いた！」と言うし、それを、コリント教会もまた、「しなければならぬ！」と教えるわけです。じゃあ、一体なぜ、パウロは、その罪を犯し続ける兄弟のことを裁いたのでしょうか？それは、彼の肉が滅ぼされて、そのことによって、彼の霊が主の日に救われるためだ！というわけです。…つまり、パウロは、その罪を犯し続ける兄弟が、教会によって処分されることで、自分の犯した過ちに気付くことができ、願わくは、そのことで、その兄弟が、最後には、自分の犯した罪を正しく悔い改めて、救われてくれる！ということを期待していたのです…。

どうぞ、もう1度、先程のマタイ 18 章のみことばに戻ってみてください。…どうか、皆さん、想像してみてください。教会が罪を犯し続ける人物のことを裁いて、除名という判断を下すということは、教会にとって大変なことです！できれば、そんな厳しい処分は、誰だってしたくはありません。私もです！でも、そうすることが神様のみことばなのです！…でも、時に、聖書の教える神様って、厳しい御方じゃありません？神様の愛とは、ただ優しいだけの愛なのではなく…、時に、厳しいものなのです！そうでしょ！

実は、マタイ 18:18-20 で教えられていますのは、そのような…、大変な中を通らされて、大きな痛みを伴っているであろう、牧師や教会員たちに対する慰めであり…、励ましの言葉なのです。ですから、ここ 18 節で、『何でもあなたがたが地上でつなぐなら…』とありますが、ここ 18 節の部分をよくご覧くださいと、『つなぐ』の(δέω)の部分に、アリタリスクがあって、欄外の注釈に、<あるいは、「禁じる」、「禁じられる」>と説明されています。それと同じように、『あなたがたが地上で解くなら…』という箇所、『解く』(λύω)という部分にも、アリタリスクがあって、欄外には、<あるいは、「許す」、「許される」>とコメントされていますでしょ。

つまり、ここで教えられてあることは…、もしも教会が、罪を犯し続ける者を除名するという判断を、神のみことばであるがゆえに、最終的に下したのなら、神は、その判断を支持してくださいし…、もしも、教会が、神のみことばに従った上で、その者を不問にする(≒無罪、問題なし)という判断を下したのなら、天の神様もまた、その判断をも支持してください！ということが、ここで教えられてあることなのです。

ここ 18 節のみことばを、そのように理解するなら…、それに続く、19-20 節のみことばも、実に、スムーズに当てはまっていきます。ここ 19 節で言われているところの、2人や3人と言いますのは…、たまたま、集会に集まって来られた数人のことを言っているのではなく…、罪を犯した者を悔い改めさせるために、“証人として集められた数人の者たちのこと”であるはずなのです。ですから、ここ 19-20 節で教えられてあることの正しい解釈は、「教会戒規」というものがなされている中で、その問題を知っている者たちが、心を合わせて祈るのなら…、天の神様が、その者たちの祈りを支持してください。その者たちが下す決定を、天の神様と、イエス様が、共に居てください…、その者たちのことを支えてください！ということなのです。

●教会戒規の教えが語られた文脈

どうか、皆さん。ここ教会戒規の教えが語られた文脈に注目してください。それは、少し前のマタイ 18:12-14 のみことばです。そこには、こう記されています。『12 あなたがたはどう思いますか。もし、だれかが百匹の羊を持っていて、そのうちの一匹が迷い出たとしたら、その人は九十九匹を山に残して、迷った一匹を捜しに出かけないでしょうか。 13 そして、もし、いたとなれば、まことに、あなたがたに告げます。その人は迷わなかった九十九匹の羊以上にこの一匹を喜ぶのです。 14 このように、この小さい者たちのひとりが増えることは、天にいますあなたがたの父のみことばではありません。』

⇒良いですか？天の神様は、私たち以上に、愛と憐れみに富んだ御方です！だから、天の神様は、たった1人でも救われずに、永遠の裁きに下ってしまうことを決して喜ばれないのです。だから、イエス様は、もしも、私たちの周りで罪を犯し続ける者が居たなら、その者が本当に救われているかどうかを吟味してや

りなさい！その罪を悔い改めて、神様のみことばに従うか？それとも、神様のみことばに逆らって、罪の快樂を選び取るか？その選択を、その者に迫ってあげなさい！というわけなのです。

だから、さっき引用したマタイ 18:15 の最初には、『また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら…』とあって、ここのみことばの前に、接続詞(δέ)があって、ここ 15 節以降の文章も、新しい段落の始まりではなく、ついさっき紹介した 12-14 節のみことばと繋がっているということが分かるのです。…つまりね、皆さん。教会戒規という、一見厳しい処分もまた、天の神様のみことばであって、愛と恵みに満ち溢れた行為であるはずなのです。どうか、そういったことを、皆さんにもご理解いただきたいと思います。

<励ましの言葉>

さて、ここまで見てきましたように、イエス様が語ってくださった救いに関するメッセージというべきものは、時に厳しい選択を、聞いた側の私たちに迫るものでありました…。いえ！神様が私たちに迫られる、「あなたは、わたしを信じますかどうですか？」という選択は、“常に”、難しいものなのです。だって、イエス様は、あの金持ちの役人がイエス様の所から悲しみながら去っていった時、弟子たちに何と教えられました？

マタイ 19:23-26 に、こう記されています。『23 それから、イエスは弟子たちに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。金持ちが天の御国に入るのはむずかしいことです。 24 まことに、あなたがたにもう一度、告げます。金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」 25 弟子たちは、これを聞くと、たいへん驚いて言った。「それでは、だれが救われることができるのでしょうか。」 26 イエスは彼らをじっと見て言われた。「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。」』

⇒ここで、イエス様が教えてくださった通り、私たち人間が救われるのは、実は非常に難しいことです。でも、私たちが最近、エペソ書の学びからも学んだ通り、救いというのは、天の神様が、その者に働きかけてくださって、神様がその者の心を開いて、救ってくださるのです！だから、私たちは、変に福音のメッセージを変えことなく、語っていきべきです！

パウロは、私たち説教者に対して、こう教えてくれています。Ⅱテモテ 2:15、『あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげよう、努め励みなさい。』って…。最近、ある牧師先生を筆頭に、「あなたは愛されています！」ということ、声を大にして、福音のトラクトを配ろうとしているということを聞いています。でも、皆さんは聞いたことがあります？イエス様が、大勢の未信者たちに向かって、「神は、あなたを愛しています。あなたは愛されているんです！」なんて…。正直、そういった内容が聖書的でないとまでは言いません。しかし、私からすると、それは『真理のみことばをまっすぐに説き明かす』行為ではなく、どちらかと言うと、Ⅱテモテ 4 章のみことばが警告しているような…、『人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言ってもらおう』(Ⅱテモテ 4:3)のような行為ではないか？と思っています。この聖書のみことばが教えてくれている福音、つまり、救いのメッセージは、かなり厳しい…、難しい選択を、私たちに迫るものではなかったでしょうか？

どうか、今日、このメッセージを聞いてくださった皆さんには、現代に遣わされた、生けるキリストのからだとして、あのイエス様が 2000 年前に語ってくださったのと同じ、福音のメッセージを語っていく者であってほしいと思います。

そうして、まだ、このイエス様のことを信じておられない皆さん。すべてを創造された生ける神様は、今も、あなたが自分の罪や過ちを悔い改めて、真の神であられるイエス様のことを信じ、救われることを願っておられます。どうか、1日も早く、唯一の救い主であられるイエス様のことを信じ、このイエス様と残りの人生を歩む者となってください！神様は、あなたに救いという恵みだけじゃない…、素晴らしい祝福と喜びを与えることが御出来になるからです。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。